

スローシティ (Slow City) は、1999年にイタリアの4つの小都市が「スローフード・スローライフの精神をまちづくりに適用しよう」と始めた都市ネットワークである。シンボルマークはカタツムリであり、加盟条件は人口5万人未満で独自の食文化を有し、有機農業や食育の実践などの「スローシティ憲章」に則ったまちづくりを行うことである。イタリアでスローフード運動が興隆したのは、ローマ・スペイン広場へのマクドナルドの出店によって、伝統的な憩いの場や食文化が失われるとの危機感が持たれたことに始まる。

一方、ファストシティ (Fast City) は、マクドナルドやユニクロなどの域外大資本が創出する、特に郊外地域に典型的な均質化した都市空間である。こうした個性を持たない都市状況を、カナダの地理学者エドワード・レルフは「没場所性 (Placelessness)」と呼んだ (東北大学地理学教室先輩の高野岳彦・阿部隆氏訳『場所の現象学』参照)。没場所性とは、個性的な場所の無造作な破壊と場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観の形成とされる。都心高層ビル、郊外ニュータウン、主要道路沿い景観、大型商業施設、押しつけがましい広告群などの画一的な都市景観は、大企業やマスコミなどによって常に現代都市では促進される。レルフは、そろそろ人々が場所についてのセンスを取り戻し、場所が人間のためにあり、多様な人間の経験を反映し高める環境とするべきであると提言した。

ファストシティによる圧倒的な没場所性圧力は、小都市にとってはひとたまりもなく、個性ある風土や人間性を喪失させてしまう。このため、欧米の中小都市

## 都市論・オムニバスエッセー④ スローシティ



寺谷 亮司 (てらや りょうじ)

1960年小樽市手宮生まれ。札幌南高卒、東北大学理学研究科博士後期課程 (地理学教室) 修了。理学博士 (東北大学)。北海道大学文学部助手、愛媛大学法文学部教授などを経て、現在、愛媛大学社会共創学部教授・地域創成研究センター長。専門は、北海道や東・南部アフリカ都市、世界の酒・盛り場、まちづくりの研究など。

小都市の取り組みに、「フランスで最も美しい村」協会の活動があり、これに倣い美瑛町の呼びかけで2005年に設立されたのが「日本で最も美しい村」連合である。7町村から出発した同連合は、2017年7月現在の加盟町村数が道内10町村を含む63町村へと拡大し、2012年にはフランス、ベルギー、カナダ、イタリアの協会と「世界で最も美しい村連合会」を結成した。

私は今年8月に、観光と酒 (ビール、米焼酎、ラム) 産業の調査のため、ラオス国を訪問した。滞在した首都ビエンチャンと世界遺産都市ルアンパバーンの両都市とも、徒歩で楽しめる都市空間のなか、車は多くなく、誰もクラクションを鳴らさず、ファストフード店もほとんど見かけなかった。国民は温和かつ親切でのんびりしており、16時に終わる官庁や会社から帰宅して長く家族と過ごすなど、国全体がスローシティだった。さらに印象深いのがラオス料理である。ラオスの飲食店では、注文しなくてもまず生野菜盛り皿が出てきて、肉・魚と野菜・香菜の炒め物 (ラープ、Larb) などの料理は決して油っぽくなく薄味であり、豊富な麺類もスープが身に染みてホットする優しい味わいである。新鮮な無農薬野菜そのものの味が濃く、味付けが絶妙であり、誇張ではなく食べた料理全てが美味しかった。